

FF14と原神って親和性
高そうだよね

PNPcon

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです

蛍・空にエオルゼアへ行ってもらおうわけにはいかないので
ヒカセンにテイワットへ行ってもらいます。

期待したものと違うという方が居たので注意書

ゲームの延長線上で展開させます。ヒカセンは「あなた」と書きます

エセ二人称、実際単数三人称の書き方ですが、通常の小説の展開とは異なります

目次

Ver 0; 序章

Ver 0.1; あなたはヒカセン

1

Ver 1; モンド城

Ver 1.0; 自由都市モンド城

14

Ver 1.1; 自由都市モンド城

26

Ver 1.0 α ; もしもヒカセンが

①

39

Ver 0 ; 序章

Ver 0. 1 ; あなたはヒカセン

あなたは冒険者だ。

数多の冒険を乗り越え、世界を救った冒険者だ。

自分の世界だけに飽き足らず、並行世界を救い続けている冒険者だ。

~~~~~♪

マイハウスで1人、音楽を奏でながらいつもの”音”を待つ。

~~~~~♪

今あなたが奏でている音楽は、とある吟遊詩人の仲間から教えてもらった曲だ。

何やら曰く付きらしく、他の人には絶対に聞かせちゃいけないよと、その仲間からは強く釘を刺されている。

確かにここ、エオルゼアでは聞いたことない音楽だな、とあなたは思う。もしかしたら、最後まで聴くと変なデバフが付いてしまうとか、一音でも間違えたらスタンするとか、そんな呪われた音楽なのかもしれない。

~~~~~♪

シャキーン!!

あなたはハツとした顔でギターをしまう。そう、待ち望んでいた”音”はこれだ。あなたと並行世界の冒険者が、世界越しに接続する準備が整った音。

あなたはいそいそと白魔道士の装備に付け替えて、準備を整える。

準備が完了したあなたは、他の並行世界の冒険者を待つ間に考え込み始めた。

今回は世界接続準備時間が長かったな。

もしかしてヒーラーは供給過多FFXIVでは特殊な場合を除いてパーティのヒーラー・火力(DPS)・タンクの人数が決まっているのでは……? まあ火力メンバーは間違いなく過剰供給されてるはずだから、タンクが過疎ってるのかな? 次は暗黒騎士を出そうか。でもなあ……タンク慣れてないし、第一に他の人からヒールを貰うことに慣れてないんだよなあ。

あなたは根っからのヒーラーだった。もちろん冒険はグリダニアから始め、帝国への強襲しかり、竜詩戦争しかり、解放戦線しかり……幾度の冒険には白魔道士で臨んできたのだ。

他のジョブにも手は出し始めてはいるが、なぜか身が入らない。

ヒーラー、特に白魔道士に固執しすぎて、他のジョブの装備は持っていないも、技量がついて来れていないのだ。

あつ、1人消えた……

そうして待つていたのだが、1人が辞退。また待つことになった。

あなたは、すぐに集まるだろうと思つていたが、なぜか例の“音”は鳴らない。

そんなこともある。そう思つていたが、待てど暮らせど一向に鳴らない。

世界の異常かな？

そう考えたあなたは一度接続を切つてみた。

そうして再度接続しようとする、見たことのないダンジョンが解放されていることに気づいた。

………

幻想世界ティワット攻略

冒険ランク 16以上

制限時間 無し

1人専用コンテンツ

………

あなたは首を傾げた。

見たことがないダンジョン、誰に依頼されたクエストかも分からない、というかそも

そも冒険ランクってなんだ？

時間制限無しっていいのか？

目を細め、顎に指を乗せる。

申請は……出来る。

まあいつか！ 行つたことないなら行つてみよう！

あなたは好奇心は人一倍高く、警戒心は人一倍薄かった。

頭に浮かんだ面白そうな冗談はいつでも言つてきた冒険者だ。平然とヤシユトラマ

マ!! なんて言い放つたあなたが、こんなことに臆するわけがなかった。

いざ申請！

シャキーン!!

あなたはいつも通り世界を渡つた。

真つ暗な世界の狭間を渡り、その流れに身を任せ、進んでいった。

7つの元素が絡み合う幻想世界テイワツト

遙か昔、人々は神々へ信仰を捧げ、元素を操る力を手に入れた世界

そのテイワツト北東部に位置するは、自由の城モンド



そこには、風神バルバトスの祝福と恵みを一身に受ける人々が豊かに暮らしている  
A Fantasy World - TEYVAT  
【幻想世界テイワット攻略】

いつものムービーを終えたあなたは、無事、幻想世界テイワットに到着したようだ。  
周辺は草木に覆われ、左斜め前方には一際大きな、それは大きな樹が見える。

エオルゼア、特にグリダニアでは、あのサイズがゴロゴロ生えてるから感覚が狂うが、  
あれはあれで十分大きそうだ。

しかしあなたはここで気づく。いったい、どこへ行けばいいのか分からないのだ。

今までなら、ああいう目立つ物が大体ゴールだったりするのだが、それもこれも世界  
からのガイドや道があるから確信するのであって、ガイドは無い、進路を阻む謎の壁も  
無い、どう見ても行けないと分かる崖や山も無い。

そんな状態では、どこに向かえばいいのか、見当もつかない。

あなたは少しだけ怒った。

どうして世界に呼ばれて来たのにガイドも道F F X I Vのコンテンツは基本一本道で寄り道は無いもつけてくれないんだ。

どこに行けばいいのかも、何を倒せばいいのかもわからないじゃないか！

あなたは、今までに何度も理不尽な目を受けたことがある。一体どうすれば解決するのか、見当もつかなかったときだってあった。

しかしどんなときでも、とりあえず何をすればいいのか、目先の目標は常に分かっていたのだ。今回の冒険にはまるでそれが無い。となれば困ってしまうのも当たり前前の話である。

——いや、待てよ。

あなたは閃いた。

時間無制限、つまりそれすらも探すダンジョンということでは……？

そして、この見渡す限りの大地を、好きなだけ冒険できる……？

あなたは悪だくみな表情をした。

——ちよつとくらい、一人旅してもいいよね……？

あなたは決めた。この世界を、冒険するまで帰らない。

この世界に呼ばれたってことは、世界が、テイワットが危機を迎えているはずだ！

間違いない！

そう確信したあなたは意気揚々と大樹へ歩き始める。

そう、冒険とは、まずエーテライト F F X I V におけるファストトラベルポイント探しから始まる。場所はあなたには分かっていた。あの大樹の下だ。

さあ！ かむおん！ 私のチョコボ！

冒険がわたしを待っている！

もちろん、チョコボを呼ぶときにはちちゃんと止まってから呼んだ。

Windrise  
風立ちの地

止むことのないそよ風が、この野原を撫でている。かつての英雄が残した巨木が微かにざわめく

あなたはなんのトラブルもなく、大樹の元にたどり着いた。

道中、見たことのない丸形生物が居たが、エーテライトと交感することが先である、と

考えたあなたは、どんな敵対モンスターも無視して駆け抜けてきた。

時間にして数分もない。意外と早かったものである。

しかしまたここで問題が発生する。

駆け寄る間にも気づいていたが……エーテライトが無いのだ。いや、正確には、あなたの知る形の、エーテライトが無いのだ。

台座に乗った石像。どうやらそれがこの世界のエーテライトの形らしい。

台座まで含めたら高さ4メートルと少し……もしかしたら5メートル弱くらいだろうか。あなたは、元々同性間では身長が高くない種族である上に、同種族同性の中でも低い方なため、正確には分からなかった。

自分の3倍以上はあるかな、という予想である。

普通のエーテライトといえど大きさはずっと離れていても見えるくらい大きいし、質感もキラキラしていて、いかにも「私！ エーテライトです！」みたいな見た目をして  
いるものだ。

街によつて多少の違いはあれど「エーテライト感」というものはどれも持っていた。

しかしこれはどうだ。

ただの石像にしか見えない。しかもなんだかヒビも多く、今にも崩れそうな見た目である。

あなたは、本当にこれで大丈夫なのか……？ と訝しんだ。以前経験した、テレポによるエーテル酔いが起こるのだけは勘弁である。

あなたは警戒心を高めた。

しかしそれもつかの間。あなたは2秒で考えることを放棄し、石像に手を伸ばす。

まあどうにかなるよね。

あなたは今までそんな気持ちで、本当にどうにかしてきてしまったのだ。今回もどうにかなると確信（過信とも言う）しつつ、交感ファストトラベルポイントを有効化する儀式のこゝろを行つた。

気持ちの良い風。さわさわと風が葉を撫でる音。

あなたの考えの通り、何の異常もなく交感できた。しかし、この風を感じたまま、もうすこし目を閉じていたいと思つた。

あなたは初めての冒険を思い出す。

そう、初めて冒険者4人で行つた、あの洞窟だ。

もはやよく覚えていないが、サンゴの色がどうかあつた気がする。黄色い四足モンスターを倒して、やたら逃げ回る海賊を叩きのめして、最後には人魚ひしやかなを叩いた。覚束ない立ち回りで、杖を振り回して、投石機同然だったのも、今となつては懐かしいあなたの思い出だ。

あなたは考え込む。そんなとき、声が響く。幼い声だ。

だが、考え込むあなたには聞こえない。

そういえば風のうわさで、平行世界の冒険者と協力しなくても良くなったとか聞いたな。ああいうまるで知らない、言葉もまともに通じない初心者マーク4人初心者には全てのプレイヤーから見える葉のマークがつく。通称：若葉でウロウロするのも面白いと思うんだけどなあ……。

「おい！ 聞いているのかー？」

あなたは聞こえている。

「おいっ！ 聞こえてるだろ!!」

あなたは耳を塞いで首を振る。

「聞こえてるんじゃないか!!」

あなたが後ろを振り向けば、そこには女の子と……モーグリ？FF世界に存在する宙に浮く謎生物。頭から球が生えており「○○クポ」と話すが居た。

しかし流暢に話すモーグリだとあなたは思った。モーグリが話す言語は、あなたが知るものではない。だが、ここのモーグリは語尾にクポクポつけるわけではないことは分かった。

一方、女の子の方については、あなたと <sup>P</sup>同じ部類だと分かった。 <sup>N</sup>一般人と <sup>P</sup>同類の違

いは感覚で掴める、あなただから出来たことだ。

さて、PCにはまずは挨拶だと相場は決まっている。あなたは最近使っていないなかったマクロ「初ID挨拶」アクションやチャットなどを前もってまとめておき、ワンクリックで一連の動作を連続で行えるようにしたもの呼び出した。

まずはお辞儀をして――

「【初めまして。】【こんにちは。】【ここに来るのは初めてです。】」

「おう！ オイラはパイモンだ！　そしてこいつは旅人！　お前は何て言うんだ？」  
なるほど分らない。あなたは首を傾げた。

仕方がない。定型文辞書相手の言語で表示される、特別なテキストチャットのこと。用意されたリスト内から選択し非母国語話者とも簡単なコミュニケーションが可能。本家とは表示が異なるが本小説では□で示すで話しかけているのに、相手が使つてくれないことはままあることだ。

「パイモン、待つて、この人……」

「なんだ？　旅人」

どうやら相手の女の子、旅人はあなたが言葉に不自由なことに気づいたようだ。

「この飛んでる生き物の名前、分かった？」

「おい旅人！　オイラを生き物なんて言うな！　オイラはパイモンだ！」

あなたにはモーグリが女の子に怒っている様子しか分からない。

もちろん女の子に言われていることは分からないし、なぜ怒っているのかも分からない。  
い。

こんな時に言うことは決まっている。

「【答えたいけど表現がわかりません。】」

「あ、やっぱり」

「ん？ なんだお前、もしかして、話せるのに言葉が分からないのか？」

あなたは、言葉が通じないことを知ってもらえたことに安堵する。

これで定型文辞書を使ってくれればいいのだけど……と淡い期待を抱くあなたが。

旅人は自分とパイモンを交互に指さして言う。

「\*\*\*、パイモン、\*\*\*、パイモン」

あなたは相手の名前が\*\*\*とPaimonであると分かった。

伊達に今まで非母国語話者を相手してきた訳ではない。定型文辞書を使わないパ  
ワースタイル系冒険者を相手にしても、どうにかしてきた実績があなたにはあるのだ。

「\*\*\*、paimon 【よろしくお願いします！】」

「おう！ 何か変な呼び方だけどよろしくな！ それで？ お前は何ていうんだ？」

「パイモン、それじゃ分からないんじゃない？」



あなたは何かを聞かれているのは分かった。あなたの過去の経験からして、ここは名前を聞かれているはずだ！ と考えた。

しかし、どう答えようかとあなたは悩む。あなたの名前をそのまま言っても、おそらく読みにくいし、長すぎる。ファーストネーム、ラストネームの文化が無さそうだ。

代わりに思いついた、光の戦士。しかし、ずっとそう呼ばれるのはあなたの性に合わないし、なにより名前らしくない。もちろん意味すら伝わらないだろう。

さてあなたが考え始めた途端に、旅人はどうやって伝えようか、悩み始める。

しかし旅人が動き始める前に、あなたはここでの名前を決めた。  
胸に2回、右手をあててアピール。あなたは口を開く。

「h i k a s e n 【よろしくお願いします！】」

つづく

Ver 1 ; モンド城

Ver 1. 0 ; 自由都市モンド城

旅人、パイモンと出会ったあなたは、彼女らの勧めで、知らずままだモンド城へ歩いてきた。

話を聞くところによると、おそらく旅人も、あなたと同じく外の世界からやってきたらしい。

それも、あなたとは違い、様々な世界を旅してきたのだという。

あなたは、この世界の話など完全にそっちのけで、旅人の話を聞いていた。固有名詞が多く、話のほとんどがジェスチャーであり、あなたには半分も伝わっていなかった。だが、あなたは根っからの冒険者だ。自分の知らない話は好物の、それは好奇心旺盛な冒険者である。自分がここにいる限りいつでも聞けるテイワットの話より、今なら旅人の冒険録を聞くべき、あなたは強くそう思っていた。

一方旅人らは、言語が分からないのだから、外の世界から来たんだろう、とは流石に結びつかず、ずいぶん遠いところから来たんだな、と思うばかり。遠い外国からやって

きたとはいえ、モンドの事も知らずここまでやってきているとは考えられず、モンド、ひいてはテイワツトの話をする必要性を考慮していなかった。

つまりあなたは、旅人たちがモンド城に向かっていることも知らず、なんの目的も無いまま旅人達に同行しているのだった。

「あ、スライム」

旅人が指さした先には丸型生物が2体。大きさは直径約2メートル弱というところか。

赤色、水色に染まっていて、いかにも火属性、水属性の攻撃を繰り出してきそうなモンスターである。

旅人は剣を取り出してあなたに見せる。

その様子は「戦える？」と訊いており、あなたは杖を取り出して、大きく頷いた。

それを見た旅人は、前は任せろと言わんばかりに全力ダツシュ。タンクでもそうそう見ない勢いっぷりである。

しかしあなたから見た旅人は、剣だけ……？ というのが正直な感想である。もつと盾とか水晶玉とかは出さないのかな？ と思ったのだ。なんか物足りない感じがするが、その装備からして被弾をよしと出来る装備でも無さそうだし（ミラプリ見た目のみを変える装備セットのことをしているなら別だが）、火力系ジョブであることは明白で

ある。

であれば、自分にも攻撃が飛んでくる前提の動きのほうがいいだろう。そう考えたあなたは、近づきながら旅人のファーストアタックを待つ。

旅人から残り2メートル。スライムもあなた達に気づいたようだ。

「ハアツ!!」

旅人が攻撃した直後にリジエネ、即効性は無いが、時間経過で回復する魔法をかける。あなたがパイモンにちらつと目を向けると、空から様子を伺っていた。どうやら、パイモンは戦えるわけではないらしい。

異世界からの旅人・冒険者の共闘マルチプレイが始まった。

S  
l  
i  
m  
e  
s  
スライム

どこにでもいる、丸いゼリー状の元素生物。

異なる元素のスライムで作られたスイーツが異なる味わいがある。

知能は極めて低い、放っておくと小さな災害を引き起こす。

さて、初バトルを終えたあなたは衝撃を受けていた。

別にモンスターが倒せなかったわけでも、誰かが大怪我をしたわけでもない。

むしろ順調そのものだったといえよう。

なにがあなたを驚かせたのか——旅人がノーダメージだったのだ。

スライムの体力は低く、あなたの無属性魔法、グレア無属性魔法のこと。白魔道士の主な火力ソースで吹き飛ぶ程度のレベル差があったとはいえ、ダメージとは受けるものである。あなたにとって戦闘とは、見える攻撃主に赤い範囲で示される範囲攻撃はともかく、敵視敵からの警戒度。パーティ内で一番高い人が優先的に攻撃されるを貰ったら攻撃は常に受けるものだと考えていた。

これを旅人はすべて躲していた。だからこそその軽装なのだ。これはあなたにとって革命だった。

しかし、冒険者が続けてもう数年を経たあなたにとって、この戦闘スタイルを変えることなど出来ない。

——じゃあいいか。このままで。

難しい問題を放棄するのは、あなたの悪い癖だった。

さて、ここであなたは気づく。はて、どこに行っていたんだっけ。

「どこに行きますか？」

「モンド城、モンド城。ご飯にしよう」

「ごはん！ やったぜー！」

言葉が通じないあなたへの扱いが慣れた旅人。あなたはモンドジョウという場所に向かっていることが分かった。

手を口に近づけるエモートから、モンドジョウで、ご飯にしようということも分かった。

あなたは喜んだ。料理に関しては全くの専門外であるあなたは、お腹が空けばりんごを齧っていたのだ。知り合いから何故か大量に押し付けられた赤いりんごだ。そんな生活をしばらく続けてきたあなたにとって、人の作ったご飯であること、それだけでご馳走なのだ。

「やったー！」

「やったー！」

あなたとパイモンはハイタッチをした。ぐるぐるまわるパイモン。両手を上げて喜ぶあなた。

一方旅人は、モラを持っていないだろう旅人を見て、パイモンほど食い意地を張るタイプじゃなければいいんだけど。と少しだけ頭を悩ませた。

風は蒲公英たんぽぽの種と詩歌と物語を遠くへ運び

穏やかな旅人を連れてくる

モンドへようこそ。

A  
city of freedom  
Mondstadt  
自由都市モンド城

湖に囲まれた都市、モンド城。数多の都市を駆け巡ってきたあなたには、サイズが少し小さく感じたが、この街からは活気を感じた。行く街々でトラブルに当たってきたあなたには、それは珍しくも冒険の幸先としてとても良いものを感じた。

「パイモン、私は冒険者協会に今日の報告をしてくるね。ヒカセンと一緒にいてあげて。あとから鹿狩りでご飯にしよう」

「おう！ わかったぜ！ ご飯待ってるからなー！」

「私は待つてくれないのね……」

すつと肩を落とす旅人。3メートルほど離れた緑のカウンターの受付嬢が、旅人をなぐさめている様子があなたには見えた。

すわトラブルか……？ 言葉が分からないあなたは、旅人について行こうとする。

「待て待て！ 旅人は成果を報告しに行つたんだ！ オイラたちは一足先にご飯に行こうぜ！」

あなたへの気遣いが全く無い話し方だが、パイモンはついて来い、というエモートをしている。

正規ルートはこっちか。

そう感じたあなたは、旅人を置いてパイモンについて行くことにした。

「そうだ！ 話がわかるじゃねーかお前！ サラの作る料理は美味いんだぞー！ 旅人が来るまでにメニューを決めておこうぜ！」

ややテンションの高いパイモン。あなたはパイモンのその大げさなアクションから、ご飯を食べに行くことが分かった。

しかし街に来たのに何もすることが無い。街に行けば何かしら問題があつて、それに対処する。そういう生き方をしてきたあなたにとって、何だか変な感覚だった。



もしかしてこの街は、もう旅人によつて問題は解決されたあとなのかもしれない。そう思ったあなたは、パイモンに質問をした。

「助けはいますか?」

「ん、旅人のことか? それともご飯の味のことか? 大丈夫! すぐに来るし、ご飯は絶品だぜ。何も心配いらぬぞ!」

グツジョブ! と右手を突き出すパイモン。あなたには問題ないことが伝わったが、どうにもまだこの街にはなにかある。冒険者としての勘がそう囁いている気がしてならない……気がする。

なお重要でない場面においてのみだが、あなたの勘が仲間たちから全くあてにされていなかったことを、あなたは知らない。あなたは決めるべき時には決めてくれる光の戦士として定評がある一方、フラフラと歩き回る、浮浪者のようにどこでも寝る寝落ち、よくギャブルをする、酒に目がない……そんな減点を重ね続け、普段はちやらんぼらんとして見られていたことも事実。一時期は場所もわきまえずシャンパンをふりかけまくり、たまたま先にいた例の双子の妹にヒット。死んだふりをするも、そのまま正座させられ、カンカンに叱られたのも懐かしい記憶である。双子の兄の方が宥めていなければ、あなたの足は使い物にならなくなっていたかもしれない。

閑話休題。

「ヒカセン！ もう見えてるあれが鹿狩りだ！ サラー！ 3人だ！ 旅人はあとから来るんだけど、いいかー？」

あなたの左手に見える店、鹿狩り。そのスタッフに向けてパイモンは手を振りながら叫んだ。

サラと呼ばれたカウンターのスタッフは笑顔で手を振りなおし、大丈夫ですよ！ と言った。

あなたには言葉の意味は伝わらなかったが、席は確保できたということは察した。

「ここに座ろうぜ。メニューは……」

「はい、鹿狩りのメニューです。来るときにも見えていましたが、珍しい種族の方ですね。ここに来るのは初めてですか？」

パイモンにメニューを渡しながら、あなたの身体を眺めるサラ。褒められた態度ではないが、それほどあなたの身体が珍しいようだ。しかし、あなたにとって値踏みされる視線は珍しいものではないし、自身も他の冒険者の服装や装備、ミラプリを観察……どころか特定までしていたものだ。今更何も失礼に当たることは無い。

そんなことは知らないサラ、ハツと気づいた様子で頭を下げる。

「失礼しました。何しろ珍しいもので」

「すつごく遠い場所から来たらしい。エオルゼア……とかいう場所らしいんだ。言葉

も、簡単な言葉なら話せるけど、聞くのは慣れていないらしい」

「はじめまして。」

あなたは片手を上げて挨拶をする。

「はじめまして！ ではぜひともモンド<sup>いち</sup>の料理を味わってもらわないといけませんね！ 注文は後ほどにしましょうか？」

「おう！ しばらくしたら旅人が来るから、その時に頼むぜ！ ありがとなー」

「承知しました。ではまたお呼びくださいね」

サラは小走りでカウンターに戻っていった。パイモンはさつそく貰ったメニューを机に広げる。

「いいか？ オイラのイチオシはこの漁師トースト、それとこの串焼き！ 最高に美味いんだ！ それからこのサラダもシャキシャキで新鮮！ それにだな……」

メニューを一つづつ指差しながら、解説をするパイモン。

笑顔でヨダレが見えてしまっているが、あなたにはそれだけこの料理が美味しいんだらうということはよく伝わった。

あなたは一息で料理を説明しきったパイモンを見て、メニューを指差して言った。

「なるほど。」「お願いします。」

「冷製肉盛り合わせだな！ オイラはどれにしよつかなく」

ペラペラとメニューを行ったり戻ったりしながら考えるパイモン。そんな中、あなたは旅人がこちらに来てるのが見えた。

しかしパイモンはメニューに夢中になっており、気づいていない様子である。あなたはどうか声をかけるべきか迷っていたが、旅人が来てしまえば一緒だろうと思い、小さく旅人に手を振った。

旅人は一瞬だけ目尻を緩めてあなたを一瞥いちべつしたが、すぐにパイモンに目を向き直し、静かにその後ろで止まる。

ああ、ちよつとだけ怒ったクルルさんはこんな感じだったか。静かに気づくのを待つから、子供に言い聞かせるような話し方をしていた。

あなたは遠い目でそう思い出した。一体どれだけ世話になったか噛み締めながら。

一方パイモンは気付かない。そうして、大声でトリガーを引いた。

「よおし、オイラはここからここまでにしよう！ ヒカセン！ 急いでサラを呼ぶぞ！ 注文してしまえばこつちのもんだ！」

「パイモン」

かくして炸裂した爆薬。あなたからすれば、見えてる地雷を踏んだパイモンだった。

ヒイ！ と引きつった声を上げるパイモン。まるでギギギギと聞こえるかのように振り返って、旅人と向き合う。空中で後ずさるというなんとも奇妙な事をしながら、言

い訳を話し出す。

そんなに食べるつもりなの？

いや、お前もきつと腹を空かしているだろうと思っ

だな……

たとえば言葉は通じなくても、仲良しな二人だな、と笑みを浮かべざるを得ない、そんなあなただった。

ちなみにあなたにとって、料理はとても美味しかった。

酒という単語をすぐにでも覚えなければ、とあなたが危惧するほど。

つづく

## Ver 1. 1 ; 自由都市モンド城

サラがカウンターを務める鹿狩り。そこで腹ごしらえを終えたあなた。

美味しい料理を食べることが出来た時は、非常に良い気分であったが、支払いの際に問題が発生した。

まず前提として、鹿狩りは前払いシステムである。そのため、先に旅人がカウンターまで赴き、注文と合わせてまとめて支払いを行っていた。その様子を遠目から見ていたあなた。旅人にご馳走になるつもりは無かったので、食後にギルを返そうとしていた。

世界が違う第一世界でも通じた、エオルゼア共通通貨ギル。もしかしたら違う通貨を使用しているかもしれない、という考えはあなたにあったが、貴金属としての価値はあるだろう。あなたはそう考えていた。

エオルゼアの通貨ギルは、それそのものに価値がある本位貨幣通貨。どこかの誰かが価値を保証する管理補償通貨ではない。従って、ギルそのものを売ることができないのだ。

しかしあなたの考えは裏切られることになった。

ギルが、エオルゼアでの貴金属が、ここモンドでは何の意味も持たなかったのである。

あなたは知らなかったが、ここテイワットでの共通通貨モラに目がないパイモンでさえ、綺麗だなくという反応。多くの世界を旅した旅人は硬貨だと認識するものの、綺麗なコインだね、という反応だった。

ギルの通貨としてどころか、そのものの価値すら認められなかったのだ。そんな仕打ちを受けたあなたは、肩を落としながら旅人に謝る。

「ごめんなさい。」

「モラのこと？ いいよ、パイモンよりずっと安く済んでるし」

「……えへっ」

右手を頭にコツンと当てるパイモン。旅人はそれを横目に重いため息を一つ。

さて、ギルがギルとしての役割を果たせないことが判明した今、非常にあなたは悩んだ。今回、旅人は許してくれたようだが、今のあなたはいわゆる素寒貧。手っ取り早く現地通貨を手に入れるには、リテイナ―FFXIV世界でプレイヤーがゲーム内で雇用できる倉庫兼売子の子のNPCを呼び出すベルも無いので（鳴らしても来てくれないだろうが）、手持ちにある数少ないアイテムを質に入れるしかない。しかしそれも価値を見出してくれるか分らない。いざとなれば街のど真ん中で野宿も厭わ<sup>いと</sup>ないあなただが、目の前の料理が食べられない、そんな状況に陥らない為にも、どうかこの通貨を手に入れる必要があった。

「お金を稼ぎたいです。」

「モラを稼ぐ方法が知りたいのか？ お前は戦えるようだし、お前も冒険者になればいいと思うぞー！」

「パイモン、多分すぐに欲しいんだと思うよ」

「そんな方法あるならオイラが教えて欲しいぞー！」

うーん、と首を傾げて悩む2人。どうやら意味は伝わったように見えたあなただが、悩む時点で楽な方法は無いんだな、と察した。デイリーのルーレット原神でいうデイリーミッションでもやれば早いか、と頭によぎったあなた。だが悲しいかな、行ったところで貰えるのは、テイワットではなくエオルゼアの通貨である。

やはり手持ちの物を売りに出すしかない。あなたがそう結論づけるのは早かった。

あなたは腰に下げたポーチからフェニックスの尾を取り出し、旅人に見せて尋ねる。

「フェニックスの尾」【買ってくれませんか？】【値段：】

赤い尾羽、フェニックスの尾。瀕死となり、戦闘不能になったプレイヤーを蘇生する効果がある。

お守り程度にひとつ持っておくか、レベルの考えで、数年間ずっと握りっぱなしになつていたアイテムだ。

「これは……？」



「うーん、モラが欲しいからって羽根を渡されてもなあ……」

やはり価値が無い様子。瀕死の仲間を蘇生できると言ったところで信じてもらえないかもしれないし、まずあなたの定型文だけの会話では、どうやっても伝わらない。瀕死の人を連れてきて実践するのも土台無理な話。それに、あなたが持っているのはこれ1個だけフェニックスの尾は1個までしか所持できないのである。

残念だが、まだ使うのは先になりそうなフェニックスの尾。あなたはポーチに戻す。「やっぱり元素を持ったものじゃないとな」

「そうだね。何に使うのか分からないから、物の価値が私たちには分からない」

あなたには元素というものが分からない。エオルゼアで言う属性のようなものだが、それが重要であることが伝わっていない。

またお使いでもこなすことになるかな……。

別にあなたにとっては苦でもないのだが、IDインスタンスダンジョンの略。原神で言う秘境中にお使いクエストを受注するとは、思っていなかったあなただった。

さて、諦めの表情のあなた、悩む表情の旅人とパイモン、双方会話をすること無く階段を登り、上へ上へと歩いていく。

時刻は18時過ぎ。日もだいたい傾いてきた頃だ。

あなたはいつもどおり、何の目的も無く旅人たちについて行く。しかしあなたの心には、ここらが潮時かな。という思いが始めていた。

ここに来て初めて出会った旅人とパイモン。特に旅人には面白い話も聞けたし、冒険の手助けをしてもらった。何も返せないままお別れ、というのは申し訳ないと感じるあなただったが、このままついて行けば、しばらく旅人のヒモになるのは目に見えている。今お礼を言つて離れるべきだと結論付けた。

そうして旅人が止まった場所は、巨大な石像前。両手をお腕のように胸の前に出して直立する、それは大きな天使像だ。

ちようどいいタイミングだ、あなたが声をかけようとするが、旅人は石像の足元を凝視している。

足首程度の浅い水に囲まれた石像の台座。そこにはハープのようなものを持った、吟遊詩人が立っていた。緑色と白色を基調とした服、中性的な顔立ち、それほど身長は高くない。

石像を眺めているように見える。しかしあなたには、詩人がどこかもつと遠いところを見つめているようにも見えた。

旅人がいきなり止まったことに対して不思議そうにしていたパイモンだが、その人物に気づいた途端、大声を出す。

「あーっ！ 吟遊野郎っ！ お前、もう大丈夫なのか!?」

吟遊詩人は手に持ったハーブを消し去り、こちらに向き直ってはにかみながら声を出す。

「やあ、パイモン、旅人。そして……ん？ 初めて見る顔だね。名前は？」

「こんにちは、ウエンティ。こっちはヒカセン。ずっと遠いところから来た、私と同じ異邦人。言葉が違うみたいで、私達の言葉を聞き取るのが苦手みたい」

ウエンティは軽やかに水を飛び越え、台座から降りる。

そうしてあなたの目の前までやってきたウエンティは、片手を上げてあなたに挨拶をした。

「こんにちは、ヒカセン。僕はウエンティ。遙々モンドへようこそ」

「h i k a s e n 【初めました。】「こんにちは。」「ここに来るのは初めてです。】」

「あはは、すごい変な喋り方だね。こちらこそよろしく」

無事に挨拶を終えたあなた。そして、またもやパイモンの大声が炸裂する。

「そんなことより！ お前、もう身体は大丈夫なのか？ えーと、あれ、あの神の目じゃなくて……そう！ 神の心！ ファデュイに取られてからそれつきり会えなかったじゃないか！ 心配したんだぞ」

「ビシィ！」と音が鳴りそうなくらい勢いをつけてウエンティを指差すパイモン。

ウエンティは困ったような顔をして、うーん、とだけ声を出す。ウエンティの目線は空を仰ぎ、ゆっくりと下がる。そうして止まった目線の行き所は、あなただ。

あなたは自分を指差し、首を傾げる。

ウエンティはそんなあなたに一度微笑んで、パイモンに目線を向け直す。

「まあ、詳しいことは言えないけど。大丈夫だよ、心配させてしまったね」

「本当なのかなぁ？」

訝しむような表情を向けるパイモン。だがそんなパイモンを見かねた旅人がそつと耳打ちをし、ハツとあなたを見て慌てだす。

「い、いやこれはだな！ あれだ、ちよつと前にコイツが大怪我……みたいな、そう、その治療で……」

「パイモン、そんな説明じゃ分からないって」

手を振って全力の言い訳をするパイモン。頭を抱える旅人。困ったように肩をすくめるウエンティ。またしても何も知らないあなた。

旅人はウエンティに目線を移し、真剣な眼差しで尋ねる。

「ウエンティ、大丈夫なんだね？」

「大丈夫だってば。パイモンが口を滑らせたほうが大丈夫じゃないよ」

「それは大丈夫。ヒカセン、本当に言葉が分かかっていないようだから」

「そうなの？ とあなたを見るウエンティ。言葉が全く通じないほど遠いところから来た異邦人は、ウエンティにとつてとても興味深いものらしい。」

「話せるのに聞けないって本当に珍しいね……。それに言葉も通じないくらい遠いところなんて。君も遠いところから来たんだったよね」

「うん、居なくなつた家族を探してる」

ふむ……。と考え出すウエンティ。そうして、あつと声を出す。

「どうしたんだ吟遊野郎。まさか、まだどこか痛むのか？」

「いや本当に大丈夫だつてば。1つ、いいことを思い出したんだ」

そう言つて人差し指を立てるウエンティ。旅人はじつとウエンティを見つめる。

「旅人、七神を探すつて前に言っていただろう？ それについて、手がかりになるかもしれない。ここ、モンドから南西に行つたところに、璃月リユエという国があることを知つてるかい？」

頷く旅人。

「その璃月で一番栄える璃月港、そこで迎仙儀式げいせんぎしきという催しが年に一度、開催されるんだ」

顎に指を乗せるあなた。正直何も分かつていない。

「そこでは、岩神モラクスが降臨して民に国の方針を伝えるんだ。つまりそこで、岩神に

会うことが出来る。もうそろそろの時期だったと思うよ」

「はっ！ そんなことをよく今まで黙っていたな！ いくぞ旅人！ ヒカセン！」

パイモンは旅人の手を引いて、連れて行く。あなたも今はついて行って、落ち着いたあたりで離れることを伝えようと考えてる。

しかしそこに待ったの声がかかる。ウエンティだ。

「えーと、ヒカセン、だったかな。ちよつと聞きたいことがあるんだ」

あなたは hikasen の発音が聞こえたので、その場に止まる。しかし、それ以外の言葉の意味はわからない。

「【答えたいけど表現がわかりません。】」

「ああ、そっか。じゃあいいかな。引き止めてしまつてごめんね」

パイモンの手を振り払った旅人が、ウエンティに向き直つて言う。

すでに10メートルほど連れて行かれていた旅人だが、静かに、それでいてやけに通る言葉だった。

「大丈夫だよ、ウエンティ。ヒカセンは、いい人だ」

その言葉を聞いたウエンティは、きよとんとした顔を見せるが、決壊するのは一瞬だった。

ウエンティは笑う。歯を見せて、大声で笑う。

「ぎ、吟遊野郎が、ついに壊れた……」

奇妙なものを見るかのような表情のパイモン。ぽかんとした表情を見せる旅人。

そうして笑い終えたウエンティは、隠しきれない笑みを浮かべたまま言う。

「君が言うならそうだろうね！ 心配した僕がバカみたいじゃないか！ 僕は道化じゃなくて、詩人なんだよ。分かっているかい？」

「【どうすればいいですか？】」

あなたには何もわからない。話している言葉も。なぜウエンティが笑っているのかも。

それを聞いた当の本人は、まだまだ笑みを残しながらも、しっかりとした発音で、一語一語伝える。

「そうだね、伝えるだけ伝えるよ。君は、君たちには、ありのまま旅を、冒険を、して欲しいんだ。旅の終わりが来ても、それまでの旅を振り返って見れるように。それと、君にはこれを」

ウエンティは両手を合わせて集中する。ものの3秒ほどで、直径50センチ程度の緑色の球が出来上がった。

「風の力を込めた元素だ。君の冒険の後押しをしてくれることだろう」

あなたは驚く。それはエオルゼアでも見た、あの風脈の泉だった。サイズは小さい

が、見た目はまんま同じだ。

あなたはウエンティに目を向け領くと、ウエンティも笑顔で領く。

「旅人と同じように、しばらく僕の力を貸してあげるよ。君なら、上手く使えるだろうね」

さて、いつも通り交感したあなたは、旅人に向き直った。もう離れることを伝えるためである。

だがあなたより先に、旅人が声を発した。

「ヒカセン、璃月、一緒に、行こう」

「行こう！」

パイモンがあなたの手を引っ張り、言う。

しかしもうヒモになる訳にはいかないあなた。

「お金がありません。」「あなたにあげられる物はなさそうです。」

「大丈夫だ！ 璃月港ならお前の物がきつと売れる！ あそこは商人の街だって有名だからな！」

「行こう、一緒に、璃月に」

よく分かっていなかったが、とにかくついてこいと強く言われれば、こつちが正規ルートかな？ と考えるあなただ。離れることは一旦置いておいて、今はとにかくつい



ていくことにした。

そうしてあなたは、旅人とパイモンに連れられ階段を降りていく。

あとに残された吟遊詩人、ウエンティ。

日が沈む。

「さて、これで風神の時間は終わり。これからはウエンティの時間だ」

今までも、そしてこれからも、風神無きモンド。

「今日も一杯やろーっと！」

陽気な風が吹いた。

そうして、あなたはモンド城を去ることになった。

モンド城滞在時間、約2時間程度。とんでもない速さでの観光だった。

隣の旅人、そしてパイモン。

しばらく一人旅では無さそうである。あなたは、まだまだ旅人に世話になることになるだろう。

冒険はまだ始まったばかり。まだまだ次の目的地は来る。  
次の目的地は商業と契約の国、璃月<sup>リュウユエ</sup>。  
あなたの冒険はこれからが本番だ。

つづく

## Verl. 0α; もしもヒカセンが①

●もしもヒカセンが【風魔龍トワリン討伐戦】

Stormterror's Lair  
風 龍 廃 墟

かつては街があつた、という痕跡を残すものの、今に残るは瓦礫の山。

その中央には、天に聳<sup>そび</sup>え立つ塔。

その塔の頂上では巨大な龍、トワリンが舞う。その背には紫色の棘、500年前の古傷が光る。

トワリンはその巨体に見合う咆哮を響かせながら飛ぶ。

何かを恐れるように、その暴風をもって周りのものを拒絶する。

塔の頂上で対するは、4人組のパーティ。モンドの民を守る為、友を救う為、空の暴君に対峙する。

モンドの「四風守護」の一柱、東風の龍トワリン。

長い年月と無限の暗闇の中、かつて澄んでいた宝石も埃で暗くなり、誇り高き龍も侵食され、憎しみに満ちた。

もはや彼の知るモンドは何処にも無い。

アビスの手を取るのは、きっと必然だったのだろう。

Stormer of Dvalinn  
風魔龍トワリン討伐戦

「トワリンが……苦しんでる」

ウエンティは消えるような声で言った。

紫の棘は、より一層トワリンを暴走させる。トワリンは叫ぶ。暴風はさらに強くなる。

「旅人！ 頑張れよっあわわわわわわっ!!」

ついに耐えられなくなったパイモンが空に飛ばされる。いくら空を飛べるパイモンでも、この暴風には耐えられなかった。あのままでは、バランスを取り直す前に、地面へ叩きつけられてしまうかもしれない。

「【救出】paimon」

「わわわわっ!? あ……あれ? こころは……」

しかし、飛ばされるのも一瞬のことだった。先程まで宙を舞っていたパイモンは、瞬く間にパーティの元に戻っていた。

あなたが助けたのだ。

救出——周りの仲間を自分の近くまで呼び寄せるアクション。次の救出まで長いインターバルが必要だが、危険な仲間を助けられる、非常に有用な技の1つだ。

さて、パイモンが無事なことを確認したあなたは、またパイモンが飛ばされないように、その胴体を左腕で脇挟む。パイモンは、細くともそのしつかりとした腕に、ガツチリとホールドされる。

数秒経ち、自分が安全な場所にあることに気づきたパイモンは、あなたに言った。

「た、助かった……お前が助けてくれなかったら危なかったぜ」

大きく頷くあなた。しかしパイモンの表情はどんどん不満げなものに変わっていく。「それはそうと、オイラが文句を言える立場じゃないことは分かっている……。でもこんなのでないだろう!」

まるで小さな樽でも抱えているかのように、脇に抱えられたパイモンは、側から見れば相当に間抜けな格好だった。

「パイモン、危ないから逃げてて」

風魔龍の暴挙を止める、その強い意思を宿した異邦人の戦士、旅人。

油断無き目でトワリンを観察し、剣を逆手に構える。

いくら間拔けな格好のパイモンが居たとしても、ここは戦場。一切の気を抜かない戦士の鏡である。

「分かったぞ！ 3人ともつ気をつけろよ！」

脇に抱え込まれたまま、叫ぶパイモン。強く頷く旅人とあなた。

パイモンはあなたの腕からするりと抜けて、空中で一回転。姿を消す。

これで、ここには旅人とウエンティ、そしてあなたの3人だけになった。

一方空をのたうち回るように飛ぶトワリン。今となつては、彼にウエンティの姿など見えていない。

ここでウエンティは問う。いつもの軽口は控えめに、それでも詩人らしい言い回しで、旅人に問う。

「さて、僕とトワリンの問題に、異邦人たる君を巻き込んでしまつて申し訳ないんだけど、協力してもらつて、いいかな？」

「そのためにここにきた」

旅人はウエンティを見るまでもなく答える。その手はモンドいちの鍛冶屋の自信作、

笛の剣を握りしめている。

「それじゃあヒカセン。君もいいかな？」

あなたは杖を構えて地面に叩きつける。タンク無しチャレンジはヒーラーの腕の見せ所だ。やる気十分のあなただった。

言葉が無くとも、戦意を十分に感じたウエンティは、弓を構える。

「さあ！　いくよー！」

空を飛ぶ相手には、旅人は手も足も出ない。自然とファーストアタックは、ウエンティの矢、それとあなたの魔法になる。

暴風の中を突き抜けるウエンティの弓矢。矢に風の力を乗せているのか、その矢は真つ直ぐと、逸れることなくトワリンへと飛ぶ。

まずはトワリンを地上に落とす。そして紫の棘を叩くこと。これが今回の目標だ。

当初、トワリン自身に攻撃することは躊躇ったウエンティだが、ここまで来てしまえば背に腹は変えられなかった。

「トワリン……ごめんね」

一方あなたは、まずディアを放った。射程距離限界だ。詠唱が必要なグレアはなかなか打てない。

2人の攻撃を受けたトワリン。直後、のたうち回るような飛び方をやめ、あなたたち

の方を向く。あなたたちを敵として認識したのだ。

すぐに急旋回をして空高くへ飛んでいくトワリン。厚い雲で姿が見えなくなる。

ひと時の静寂。だがすぐに、風の声を聞くウエンティが異常を察知する。

トワリンが、来る。

「……から走って！」

あなたたちの正面、雲の奥からトワリンが飛び出して来る。

とんでもない速度で、その巨体をもつてあなたたちを轢くつもりだ。

旅人とあなたは同じ方向へ走る。ウエンティは逆サイドへ走る。

足が速い旅人に置いていかれそうになるあなた。すぐにスプリントを使用して全力

で走る。

一直線にあなたたちに向かって飛翔するトワリン。ぐんぐんと速度を上げて、その鋭い爪を地面に擦りつけながら突撃してくる。ガリガリと地面の石が弾き飛ばされ、地面には深い溝が残された。もしあれに轢かれれば、挽肉になることは間違いない。

全速力で走ったあなたと旅人は、無事に攻撃範囲から脱することができた。振り返ってみれば、ウエンティも無事に躲すことが出来たようだ。

あなたは思う。もはやここまで大きければ質量兵器、トワリンの攻撃全てが極大の範囲攻撃だと。



トワリンが誰を狙っているかなど関係ない。まずは地上に引きずり落とすことからだ。

塔をぐるりと旋回してあなたたちを再度視認したトワリン。そのまま塔中央の崩壊した部分に陣取る。

動きが少なくなったトワリン目掛けて、あなたとウエンティは攻撃を行う。一方で遠距離攻撃の手段を持たない旅人は、トワリンの様子を伺い攻撃のチャンスを見計らう。

滞空するトワリン。ここで羽の動きが変わる。巨体を少し持ち上げ、その顎を開く。噛みついてくる気だ。

あなたとウエンティは、先の突進と同じくそれぞれ両サイドに走る。

しかし旅人、トワリンに向かって一直線に走り始めた。

あぶない！ 異変を察知したあなたは驚いて声を出す。真つ先に救出が頭をよぎるが、パイモンに使ったばかりだ。まだ使えない。

仕方なしに、あなたは旅人へデイヴァインベニゾン一定量のダメージを防ぐバリアをかけながら走る。もし旅人が当たっても、塔から落ちなければいくらでも復帰させてやる！ そう強く思っ、後追いの回復を意識する。

だがあなたの意に反して、旅人は横へ大きくステップ、華麗にトワリンの大顎を躲した。そして走るスピードを緩めることなく、逆手に持った片手剣をトワリンの側面に突

き立て、その巨体スレスレを走り抜けた。

誰にも当たらない攻撃を犯したトワリンはスキを晒す。トワリンの前足付近で止まった旅人は、そのまま何度も追撃を加えていく。

あなたは安堵のため息を漏らす。旅人はヒーラーの肝を冷やすのが上手い。

安全圏まで大きく逃げたあなただったが、もちろんこのチャンス逃しはしない。ウエンティは背の棘を、あなたはトワリンへ攻撃を加えていく。

あなたたちが乗る台に、その前足が引つかかるような体勢となったトワリン。あなたたちの猛攻に晒されながらも、なかなか空へ飛び立てない。不安定な足場で、その巨大な身体を持ち上げるだけの揚力を得るのには、時間がかかるようだ。

数秒の時間をかけて、身体の半分を台の上に持ち上げるトワリン。その大きな羽を限界まで広げた。飛び立つ気だ。

「風よ」

「逃げようなんて思わないでよね」

ここで旅人、ウエンティの二人は、意図せずして同時に風の元素を打ち込む。

これにはトワリンも耐えられない。必死に落ちまいと前足を台に引っ掛けるものの、翼の力は抜け、その頭を地面に叩きつけた。

チャンスだ。

トワリンの棘を壊すため、トワリンの頭へ近づくあなた。しかしここであなたは、トワリンの背の棘から違和感を感じる。

何の違和感だ。あなたは悩みながらもさらに距離を詰め、気づいた。

あれはただの棘ではない。毒だ。呪いのように強烈な怨念が籠もった劇毒が、棘のよう<sup>う</sup>に結晶化し、トワリンの身体を蝕んでいるのだ。

であればあなたのやることは1つ。あなたは白魔道士。白魔道士が最も得意とするもの、それは癒しだ。

あなたは誰よりも先にトワリンの背へ飛び乗り、背の毒棘どくきょくに手を当てて浄化を始める。

ウエンティは弓の射線上に飛び出してきたあなたを撃ち抜かないよう、弓を下げる。最初は一体何を始めるのかと懷疑心を持ったが、すぐに驚愕の表情に変わり納得した。目に見えて毒が浄化されていく。

「まさか旅人の他に、あの毒を浄化できる人物が居たなんて……」

みるみるうちに毒棘は小さくなる。紫色の粒子が空へと飛び上がり、その分だけ棘は小さくなっていく。

トワリンは動かない。その身体を横にしてしまえば、ちっほけなあなたは、すぐにこの塔から放り出されるのに。

もうこの時点でトワリンは気づいていた。自分の身体から、毒が抜けていつていることを。自分を拒絶するためではなく、この苦しみから解き放つために、この3人は挑んできたことを。

トワリンが暴走した理由、それは恐れ——人々から、モンドの民から、自分のことが忘れられることだった。

500年前、神に命じられたトワリンは、身を挺してまでモンドを救ったのにも関わらず、今では災いを呼ぶ風魔龍と呼ばれ疎まれた。

その満たされない心の奥底に手を伸ばしてきたのは、アビス教団。トワリンの心のスキマを埋めるように入り込み、墮落させた。

しかしその恐れも、アビスの計略も、いま潰えた。  
暴風が止まる。

トワリンの毒はまだ消え去っていない。しかしもう彼の憎しみは消え去った。ならばその嵐は消えるが道理。

穏やかな風が吹く。

空にはライアーの音色が響き渡り、吟遊詩人は詠う。

詩は、風に乗って運ばれ、空に消えていった。

「こうして、モンドの四風守護の石柱、東風の龍は、正気を取り戻して空を飛んだとき、めでたしめでたし！」

「ほお……。今回は、変わった詩だな」

「えへへ、たまにはこういうのもいいでしょう？」

「ここは酒場の野外席。酒場には場を盛り上げる詩人がつきもの。」

「そうだな、たまには、こういう冒険談も悪くない」

「おつ、分かってくれるかい？」

ウイंकを飛ばす吟遊詩人。隻眼の男は、それを受け止めること無く、後ろを振り返って言う。

「まあもし、それを為したのがアイツだって言われたら、酒の肴程度にはなるなだろうな」

「ふふつ。人は案外、見かけによらないものだよ？」

2人の目線の先には、机に角を突き刺して、よだれを垂らしながら伏す人物。その周りにはワインの空ビンが並ぶ。

「それで」

「ん？」

隻眼の男は、空を見上げ、天に指差す。

「続きがあるんだろう」

その言葉を聞いて、同じく空を見上げる詩人。

しばらくして、僕の独り言だけどね、と前置きを入れてから話し始める。

「彼は、自由になつたんだ。今はそれが分からずとも探しているんだ。この風が届くところで、きつと」

隻眼の男は頬を緩ませ、目を細める。

男は先程の詩人と同じく、俺の独り言だが、と前置きして続ける。

「少なくとも、自由の行き先がアレではないことを、祈るだけだ」

「……ヒック」

2人は笑った。

四風守護の一柱、東風の龍トワリン。今となつては、彼にその肩書は要らない。いつか“自由”の、本当の意味を見つけられるまで。

だがそれも、すぐに見つかるだろう。  
彼<sup>か</sup>の神は、自由の神なのだから。